

第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

―劇壇の被災と苦衷―

激震の衝撃市川左団次く新劇の震災と復興理念く坪内逍遙震災教訓く絶望する小山内薫く
帰国の決意土方与志く久米正雄の鎌倉震災く吉井勇業火余燼く震災日記秋田雨雀

関東大震災は首都の興行施設を壊滅させ、新劇に係わる人々やその留守宅をも直撃した。小山内薫とともに自由劇場の公演を遂行し、新劇勃興を先導した市川左団次も、公演を前にして大地震に襲われ、自宅から上野、滝野川、東中野へと避難する。

大地震の衝撃と避難（市川左団次著『左団次芸談』）

（大正）十二年は六月の明治座を了えてから、九月は歌舞伎座に出演することとなった。

その九月一日である。午後一時から岡本綺堂氏作『鬼薙清吉』の本読があるので、まだ家にいると午前十一時五八分、関東一帯を襲ったあの大震災である。―土蔵の瓦が一、二枚落ちて、塀が少し倒れたきりで、

大したこともないので、落ちついていると、そのうち下町に異様な光を発する火の手が見えた。（猫いらず）の本舗だと云う。間も無く猿楽町の方から火が上ってきたと云う騒ぎ。大丈夫だと思っていたものの、女達がいいたので、とにかく立退くようにと云い渡して、弟子達に荷物を頼み、妻の姉の上野の家に引上げた。私の家の辺は被害が殆ど無かったので、近所の人はまだ立退く気配も無く、私の家の者が一番早かったようである。

すると二日の晩になって、上野の山に火が廻ってきたというので、山の上は大騒乱を極めた。これは避難の人で山が一杯なので、後からきた人達が仕方なく、日暮里の方に続々と行くのを、山から逃げて行くものと誤っての混乱と後になって知れたが、私達も線路を伝って、滝野川の知人の家に移った。するとまた、朝鮮人云々の噂が近隣を騒したので、その知人の妹の家が東中野にあって、田舎の物持の娘でそこならば米も豊富に得られると云うので、自動車を一台中見つけて、東中野の某家に落着いた。ところが先方は夫婦暮し、こちらは同勢七、八人で、なかなか米が足りないらしいのが解ってきて、気の毒になったので、私の車夫に米を探させて買ってこさせなどしているうちに、牛乳配達が中野野方村に家を見つけてきてくれたので、七日にそこへ引移った。まだ建てたばかりの家で、障子も張ってなかったが、結局その方が涼しいと云って、一カ月もそこに起き伏しをしていた。

東京で芝居を演ることは、まだ一年位は覚つかないと思っていたので、当分はそこに籠るつもりでいたところへ、大阪から話があったが、それは断ると今度はたしか十月の二日に京都から話があったので、十一月には京都で演らうということになった。

ちょうど小山内君は大阪に引移るというので、一緒に行くことにして、東海道線はまだ復旧されていなか

ったので、上野から十月二日に発った。汽車の中は大混雑で一睡も出来ず、おまけに親不知のあたりで、夜二時頃に半時間近くも停車してしまったので、小山内君と車外に出て、名月の荒磯を歩きながら、灰燼と化した東京のことを語りあった。・・・

震災では貴重な書籍や書画骨董を灰にしまったが、立退く時には自分のものだけが焼けるので、また直ぐ集るといふ気がしていた。岡本綺堂氏も震災後一時麻布に住まわれていたが、その話をするときやはり同じような気持であったと語られた。中野に落着いてからは、ことによると蔵だけは残っていて、そのものには無事かも知れぬという気もしていたが、十日程経って行ってみると、やはり跡形もなかった。①

帝国劇場における自由劇場の公演が杜絶したあとも、市川左団次は活躍を続け、大正九年には新富座で岡鬼太郎作『今様薩摩歌』を、また歌舞伎座で中村吉蔵作『井伊大老の死』に出演した。さらに大地震の前年京都南座での公演に先立って、十月一日洛東の知恩院山門前で野外劇、松居松葉作『織田信長』が演じられた。松竹大谷社長の後援により左団次が主役を演じ、祇園花街の少女五十余名が稚児姿で舞い、小山内薫も演出に参加した。無料で提供されたこの野外劇には観衆十万人が押し寄せたとされる。②

大地震の翌年六月に刊行された改造社編『大正大地震災誌』には、演劇の分野に関して河竹繁俊の論稿「歌舞伎

① 市川左団次著『左団次芸談』一五六―一五九頁。

② 同書。一五二―一五六頁。

劇に及ぼせる影響」とともに、戯曲家中村吉蔵の執筆「破壊前後の新劇」が収録される。この寄稿において中村は劇壇震災の概要を誌したあと、営利主義を排除した新劇復興の理念を提起している。まずは演劇の壊滅を要約する前半をつぎに示す。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」（改造社『大正大地震災誌』）

大正の大震災は帝都のあらゆる文化機関を片ツ端から破壊し去ったが、その中でも殆んど字義通り破壊し尽されたのは劇場である。劇場が直に演劇の成立に必要な欠くべからざる条件であり、機関である以上は、それが破壊し尽されたといふ事は、演劇が一時的に滅亡した事になる。・・・さし当たり、震災前に漸く勃興して来て我が国の在来の歌舞伎劇に挑戦を試みつつあった新劇の過程と、今回の破壊に基づくその当面の影響とを一瞥しよう。

元来新劇とは旧劇、即ち徳川封建期の遺産たる在来の歌舞伎劇に対して、明治大正以後の新時代の精神を基調とし、西欧の近代劇の感化影響をその内容の上にも、又その形式の上にも著しく反応した新作戯曲の演出を意味するものであるのは云うまでもないが、西欧の近代劇の第一期が、主として自然主義乃至写実主義派の心理的解剖を重んずる傾向のものであって、従って小劇場形式の芸術であった如く、我国に起った新劇運動も亦多くはさうした趨勢を追うて、小劇場形式の芸術を打建てるための努力が続けられて行った。ところが在来の歌舞伎劇の大規模な芸術様式に適合すべく作られた所謂大劇場の、あの龐大な建築はこの種の新劇にあまり適合しているとは云へない。唯洋風建築のプロセニウム舞台を持った帝国劇場と、さらに西洋の

中小劇場の建築様式をそのまま移植して来た有楽座とだけが、新劇の演出に最も適合していた。殊に有楽座が独特の壇場だったと云ってもよく、事実には於ても新劇の発祥地となった記録を作っている。

この有楽座の建築せられたのは明治四一年十二月で、在来の興行師の企業欲から離れて、華族富豪の有志者が新しい演芸を起さうとする多少の理想的計画のもとに成立ったものである。この劇場に於て明治四二年十一月小山内薫と左団次の自由劇場が、森鷗外訳のイブセン劇『ボルクマン』を上演して、西洋近代劇を初めて我國の劇界に紹介し、従来の新劇のために第一の烽火を挙げたのは、当時の一センチヨンであった。その後数回自由劇場はこの舞台を利用して数種の西洋近代劇を試演すると同時に、新進の劇作家、秋田雨雀、長田秀雄、吉井勇等の創作戯曲をも紹介した。・・・

有楽座に次いで、若しくは相並んで新劇の為に相当の功績を残したのは帝国劇場である。同座は明治四二年の創立でルネッサンスの建築様式に則り、白煉瓦の巨大な樓閣を外濠に近く聳立させて帝都の一大美観であったが、プロセニアム舞台を持っていただけに、他の日本式大劇場の、舞台の間口のムヤミにだだ広いのとは異つてその間口八間、奥行九間、プロセニアムの高さ四間、定員千六百三人であった。この舞台で文芸協会の『人形の家』が始めて公演せられ、松井須磨子が我が国最初の女優たる事を認められたのは明治四四年十一月である。・・・今回の大震災はそうした記念の舞台を焼尽したが、外郭はそのままに残つてゐて、近く再建される筈である。その意味では有楽座の喪失に比べれば、我々の遺憾の度は幸に少ないと云わねばならない。

又歌舞伎座は日本式大劇場の或意味で模範的のものであったが、震災の二年前に失火して全焼した。一、二の例外を除いて新劇には殆んど縁がないが、大劇場形式の新劇発生の一基点と見る時には、大正九年五月

坪内逍遙の新史劇『名残の星月夜』を上演し、次いで七月に自分の創作した『井伊大老の死』を上演しているのは記憶すべきものであらう。新築中に起つた震災の被害は比較的軽かつたようであるが、こんどのは舞台間口十六間の設計と聞いては、今後の大劇場形式新劇場が果たしてそれに適合する可能性を持ち得るのか否かは相当の疑問である。猶この他に明治座、本郷座、市村座に浅草の公園劇場、三国座等の中には新劇運動と因縁があるものもあり、またそれぞれに新劇が旧劇若しくは通俗劇と雑居して、そこに多少の分布地図を描いていたが、震災のために悉く灰燼に帰し去つた。これは一時的にも旧劇に対する大打撃であるが、同時に新劇に対しても亦相当の損害であるのは勿論である。・・・

我國に於ける新劇の第一期、即ち近代劇運動時代に於ては、ひたすら純芸術的な新劇の為に途を拓かんとする熱意と期待とに燃えて、そこに全力的な戦いが戦われたのであるが、それが中途で所謂民衆化の傾向へ転回して行つた為に、必然に商業主義化されて来て、やがて創作劇が普通の営利劇場へ迎えられて行くに都合の善い段取が付いたと同時に、創作劇そのものの半面には不純分子が鼠入する動機が醸されて、近代劇運動の当初の理想的な出発点とは距離があり過ぎるといふ批難が一部から加えられているが、それも強ち無稽の言として斥ける事はできない。・・・新劇がそうして普通興行に割込んで行つた結果、帝劇や有楽座は暫く別として、日本式の大劇場の大舞台の上に、本来小劇場形式の新芸術が一時の間借り状態で、落着かない状態で雑居者の如く取扱われねばならなかったのは、敏感な鑑賞家の眼には一の醜態として映じたかも知れない。それだけならまだ宥されもするが、他の全く芸術のテンペラメントの異つてゐる歌舞伎劇などに混入して演出される点では、折角の新劇をして寄席興行の余興扱いさせる遺憾がないとは云えなかった。その根源は即劇場の商業主義から来ていると云へば、それはたしかに誤りのない真理である。・・・

上演されつつあった新劇の内容、基調精神の問題に到ってはここで手輕に一掃的の論断は下されないが、その多くは自然主義乃至写真主義の範圍に止まり、若しくは一種の唯美主義に低廻していたと云っても大過はない。勿論近代劇運動の主潮の一はそこに聞いているが、今全世界の実生活の地盤を震撼しつつある最も現実的なブルジョア対プロレタリアの抗争から捲起された思想感情の激しい渦巻、その渦巻のためにやがて崩壊して行こうとする錯覚的現代文化の運命、原始的に更生せんとして苦悶しつつある人間の魂の呻めき――そうした世界大戦以後の煉獄に投ぜられた人間の实生活図は、我國の既出の創作劇にはまだよく現われている。①

島根県で旅館の息子として生まれた中村吉蔵は、公証人の書生や為替貯金管理所の書記を勤めた。苦学しつつ彼は早くから数々の小説を雑誌に投稿し入選する。やがて上京して広津和郎のもとに寄寓し、早稲田大学に入学。その後欧米での留学と遍歴によって演劇への関心を深め、帰国後島村抱月の主宰する芸術座に参加する。大正三年から大正八年にかけて彼の戯曲、『飯』や『剃刀』が帝国劇場で松井須磨子を主役として公演された。②
関東大震災の勃発に際しキリスト者内村鑑三は、主宰する雑誌『聖書之研究』につぎのとおり惨禍を語った。

① 中村吉蔵「破壊前後の新劇」(『大正大震災誌』改造社、一九二四年。)一七六―一八〇頁

② 大山功著『近代日本戯曲史』第二卷(大正編)四八〇―四八一、四八五―四九〇頁。

『新人物立志伝―苦学力行』大日本雄弁会、一九二二年。五四―六六頁。

「日本国の華をあつめたる東京市は滅びた。然し何が滅びたのであるか。帝国劇場が滅びた。三越呉服店が滅びた。白木屋、松屋、伊東呉服店が滅びた、御木本の真珠店が滅びた。天賞堂、大勝堂等の装飾店が滅びた。」文明開化や富国強兵による世の驕慢と墮落を嘆く内村は、「天国建設の為に害を為す」として、帝国劇場に対する天誅をまず挙げる。①

震災に関する坪内逍遙の論述はかなり長文にわたるが、これを文明是正の好機とも判断し、自作『役の行者』にも言及しつつ、自然と人間の融合・調和を希求する。文学と演劇の近代化を先導した坪内逍遙は、『桐一葉』など新歌舞伎を創作した後、大正期には壮大な戯曲『役の行者』を完成した。この頃からしばしば胃病に悩み、早稲田大学の教壇を離れ、同大学総長への就任も固辞。大地震の年は四月まで熱海で静養し、八月に岐阜から志摩を巡り帰京したのである。②

坪内逍遙「大地震より得たる教訓」(『逍遙全集』第十卷)

今度の大地震はわが建国以来の最大厄で、全国民の大不幸、大損失ではあるが、めいめいの覚悟次第で、この禍いを転じて幸いとなして、却ってこれを新日本興隆の機縁とすることも出来る。そうしてそれは、主として今度の天災に対するわれわれの観察と態度とによるのである。

① 内村鑑三「新日本建設の絶好の機会」『聖書之研究』第二七九号(大正十二年十月)、五一―六頁。

② 「逍遙年譜」(『逍遙選集』春陽堂、一九二七年。第十二卷。付録、二五―三三頁。

常識的に観れば、今度の大震は前古未曾有の、殆ど世界の史上にも先例のなかった程の大災だというに止まるが、あるいはやや皮肉に、かえって一種の天幸であつたのだと観る見方もある。或いは天譴だと観る者もある。東西内外ともに昔から何か大きな災厄が起ると、それを神または天が人間の不埒を憤るあまりに降す懲罰と解する例がある。現に明暦の大火や安政の大地震の際にもそういう觀察をした者があつた。・・・

災前のわが国は、ある一部の人々には、噴火山上にあるものとしばしば評されていたくらいで、何等かの大破裂によらない以上は、どうすことも出来ない程度に行き詰っていた。政治、社会、其他、公私一切の団体に、個人生活に錆び付いた鉄糞のように固着していた情弊や因習は、何等かの未曽有の破壊力を待たなければ取除かれさうに思われなかった。かの世界的大戦争から無損害で浮び上がったのはわが国の仕合わせだったが、それが為に国民の大多数が成金根性になって、射倖と虚栄とで浮ツ調子になって、目前の私利私欲にばかり耽り、驕奢、荒淫をほしきままにしていた。ところが今度の大震災はそういう悪弊のために靡爛し切っていた日本を、首都東京を代表せしめて、一挙に之を微塵となし、社会的に大死一番させない以上は、如何ともすべからざる程度に行き詰っていた局面を打開し、淨裸々の原真に帰らしめようとしたのだと観れば観られないこともない。実に今は世界の大過渡期であり、人間そのものの大改造期である。・・・

今の人間は自然に随循して生活しているものだとはいえない。彼等は無理に海川を埋めてそこに住宅地を拡げる。縦横に山腹を掘り穿ってそこにトンネルを通ずる。処かまわず摩天楼を築き上げる。山林を濫伐する。夜を昼にして不自然な勞務を続けたり、不自然な遊びに耽ったりする。不自然な飲食物や嗜好品や麻醉性の薬剤を製つて口腹の欲を欲しいままにする。或いは男女の性的關係を一種の遊戲扱いにする。・・・

もし自然がエホバの如き、もしくはジュピターの如き人格神であつたなら、この人間の不従順を、無礼を、

僭越を、暴戾を憤激し赫怒しないではおかないであろう。その昔、役の行者が葛城山から金剛山へ磐橋を架そうとした時、あらゆる山の神共を駆り集めて之にその勞役を課したところ、一言主という神だけがその命を奉じなかつたので、之を石室に呪縛したという伝説がある。それをかつて作の骨子にして、わざと筋を変えて『行者と女魔』という一脚本を作つたが、それによると一言主は行者のために先年楠に身動き出来ぬやうに呪縛されて、何十年という間呻き苦しんで、行者を呪い罵り機会さえあれば、呪縛を破つてあばれ出して、行者及び人間に復讐をしようとしている事になっているが、それは人間の智慧に呪縛されて余儀なく虐使されている自然力とても、よし意識はなく、意志はなくとも、もし人間の所為が余りに自然の法則に逆戾するようだと、恐らくいつかは大報復を試みる時が来るだろう、ということを比喻したのであつた。・・・

自然に随順しつつ営む和衷協力の生活！それがもたらす貢献！それがわが日本の復興期の文化であらねばならぬごとく、それがまた世界の新文化の主たる要素であらねばなるまい。世界列国は今や十九世紀以来の、全く空前の人間生活の大発展、大拡張によって、かえって比隣の如く相接近するようになったために、四海同胞の、昔は白昼夢と思われた理想も、いまはこれを現実となし得べき機会が比較的得易くなつてきた。・・われわれはすべからず今度の大災に教えられて、内外の自然を虐使したり拘禁したりしないで、馴致し、善用し、かつつねに相愛、相助の和衷協同の生活を営むことにその最善の努力を致し、よつてわが日本の新

大地震勃発のとき小山内薫は、家族とともに関西に滞在し、東京四谷の留守宅も被災を免れた。新劇再生の悲願をなお秘めて、ときを待つ小山内の心境を震災の惨禍は一層沈痛にした。演劇界の伝統と傾向に失望した小山内薫は、その後松竹キネマの研究所所長として招かれ、わが国初の劇映画『路上の霊魂』を軽井沢で撮影する。しかし、大正十二年の春松竹経営陣との紛糾もあって、すべての興行と劇団から離れ、書斎での演劇研究に専念していた。

大地震直後の苦衷（小山内薫「築地小劇場建設まで」）

私が昨年の三月、松竹と手を切った時―それは私が日本の営利的劇場の総てに対して望みを絶った時でした。私は再び日本に於ける営利的の劇場には如何なる関係に於いてもはいって行くまいと決意しました。當時の私にとって「前途」はありませんでした。目の前は闇でした。私は唯書いて、僅に生活し、僅に自分を慰めました。

その内に私の思想の上に或黎明が来ました。それは独逸へ行っている土方が帰って来たら、二人で演劇学

① 坪内逍遙「大地震より得たる教訓」(『逍遙全集』第十卷、八三九、八四二、八五〇―八五一、八六三―八六四頁。

校を興すことでした。勿論この考えは余程前から私にありました。営利的劇場と全く絶縁するに及んで、もうこれより外に自分の行くべき路はないと思うようになったのです。

物質上の根柢があつたのでもありません。組織上の同志があつたのでもありません。私は唯ぼんやり―併し強い希望を持って―土方が帰って来たら、二人でそれを始めようと思っていたのです。そしてそれを楽しんでいました。その考えは誰にも知られずに私自身を慰め且つ励ましていました。

大地震が来ました―その時、私は家族を挙げて地方にいました―東京の殆んど総ての劇場は焼け亡びてしまいました。私の心の中で半年前に亡びてしまっていた総ての劇場は目に見ゆる形の上でも亡びてしまったのです。

併し総ての劇場が亡びると共に私自身の希望も亡びてしまひました。演劇学校の建設などはもう当分思いもつかない事になってしまひました。少くとも十年のギャップが私の目の前に口を開いたのです。私にはもう自分の生きてゐる間に自分の進もうとする道が一步でも歩けるか、それが疑わしくなつて来ました。第二の絶望が来たのです―しかもその絶望は私にとって最後の絶望でした。

私はその儘地方にいました。その儘東京へ帰りませんでした。私の友人は私が東京を見捨てたと言って私を罵りました。だが私はその時東京を見捨てたではありません。私が若し東京を見捨てたとすれば、もう半年前に見捨てていたのです。私はもう半年前に東京の劇団を離れてゐました。東京の劇団はもう半年前に私を追い出していたのです。東京の劇団はもう私を必要としていなかったのです。もう私は何処にいいように好い体になっていたのです。

私は何を罵られても黙ってじっとしていました。実際それについて一言の弁明もしませんでした。一言一

句も書きませんでした。そして死よりも暗い絶望を抱きながら、黙って静に毀れた東京を見ていました。震災後の東京の劇壇―すべてが亡びすべてが新しく生まれて来なければならぬ劇団―そこから生まれて来たものは果してなんでしょう。

営利劇場の基礎もない競争的宣伝、劇場の全滅を好い事にして、そここに首をもたげた忙しげな新劇団、バラック俳優、バラック演技、バラック興行師、

私はいよいよ絶望しました。もうどうにも救いようがないと思いました。ひねくれた自分の根性かも知れません。徒らな反抗的精神からかも知れません。私は唯読んで書こうと思ひました。書いて読もうと思ひました。如何に叛かれても憎む事の出来ない演劇を、せまい書斎の内に、それよりも狭い自分自身の頭脳の内を作り上げようと思いました。①

小山内薫はひととき帰宅して、彼は東京の惨禍を見詰め、大阪への転居を決意する。次男宏の嫁小山内富士による評伝では、留守宅の無事と大阪での暮らしも語られる。

大阪への小山内転居（小山内富士『小山内薫―近代演劇を拓く』）

大震災のその夏、薫の三人の子供と登女子は、薫の大阪での仕事に便乗して夏季休暇の避暑地を神戸の六

① 小山内薫「築地小劇場建設まで」（『築地小劇場』一九二四年、創刊号。五九―六一頁。）

甲に選んでいた。四谷の留守宅には書生と女中と姉の礼子が残っていた。三男の喬は小学校の一年生で次男宏も、長男徹もまだ小学生であった。二学期は九月一日から始まる。東京へ帰る準備も整った前日の八月三十一日、三男の喬が突然腹痛を訴えたので、帰京は延期されることになった。ここへ東京周辺は地震で阿鼻叫喚の巷と化したのであった。「あるとき喬の腹痛という偶然がなかったら、私たちもどうなっていたかわかりません」と登女子は災難を免れたそのときの幸運をよく私との話題にした。……

薫は家族をそのまま大阪に残して、単身東京へ戻った。一般人の上京は制限されていた。薫は新聞関係の報道員の身分証明書を持参しての一時帰郷であった。

四谷南町の留守宅は崩壊からも火災からも免れ、書籍類も無事であったし、病弱な姉礼子をはじめ書生や女中も無事だったことを薫は何より喜んだ。東京周辺は一面の焼け野が原で、冷静さを失った巷には流言飛語が飛び交い、治安も悪く騒然としていた。薫は家族を大阪に足止めさせておき、これを機会にいよいよ書斎に籠る決意を固め、家族も大阪へ引っ越させることにしたのだった。

天王寺悲殿院町の家への引越し、そこはプラトン社中山社長の持ち家で、明治情緒の漂う大きな洋館だった。部屋数もたくさんあったので、小山内家一家が広い二階に住み、階下には妹の岡田八千代と松竹の女優さん親子と、薫の仕事の助手をしていた若き日の川口松太郎が、一部屋ずつを占めて、四世帯が二か所の台所を使って暮らすことになった。①

① 小山内富士著『小山内薫―近代演劇を拓く』慶応大学出版部、二〇〇五年。一八三―一八五頁。

土方与志の夫人梅子は大正初期の日銀総裁、三島弥太郎子爵の次女である。ヨーロッパに滞在する土方与志の留守宅は被災を免れるが、小石川林町の豪邸へは親族のみならず、近隣の住民百余名が避難した。のちに築地小劇場の運営にも尽力する梅子は、罹災者のため炊き出しや買いものに忙殺される。大地震から派生した危険、朝鮮人騒ぎや亀戸事件をも彼女は切実に感じた。

大地震の被災と救助 『土方梅子自伝』

与志が出発した翌年の秋に私は敬太を連れてフランスへ旅立つことになりました。母はまたあとから来る予定でした。九段の学校も夏休みまで仕事をやめ、船の切符も入手し、すべて準備を完了して九月十日の乗船を待つばかりになりました。しかし、突然この出発は中止せざるを得なくなりました。九月一日におこった関東大震災によって、東京一帯が大混乱に落ち入ったため渡欧どころではなくなったのです。

小石川の家は倒壊や火事の被害はありませんでしたが、その大きな地震は、ふるえ上がるようなこわさでした。家の中には、何時またゆりかえしが起って家がたおれるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っておりました。満二歳の誕生日を間近かにひかえた敬太も、無事でほっとしましたが、家の中にあるおもちゃを欲しがって泣くのには閉口しました。第一のゆれは正午頃でしたが、夕方になるとあちこちで火の手の上るなかを、姑の実家加藤家や、叔母の嫁ぎ先の吉川家（もと長州岩国藩主）の人たちが、高台にある私たちの家を頼って逃げて来ました。近所の方々も庭の広い私の家へ避難して

来られたので、日頃は家族数の少い土方の家も、この時は百人以上の人たちで埋まりました・・・

わが家では百人以上もの罹災者に、炊き出しをしなくてはなりません。主婦として私はその中止になって働きしました。大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずも用意しなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しにでかけました。

しかし、その途中が大変でした。道路には焼け出された人たちがあふれ、人力車に乗っている私にかつてどなります。「ばかやろうー!」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオー着物着て、すますてやがる、非常時だぞ!」

道端のあちこちの家もこわれたり、焼けくすぶったりしています。引き返したいと思いましたが、主婦として大勢の避難して来た人たちの食事を用意しなければならない、今は自分にとってそれが一番大切な役目だと考え、決心して罵声を浴びながら小石川と本郷を往復しました。片腿をそのまま燻製にした大きなハムやカンヅメをたくさん買いこんで人力車に乗せ、小石川の家へたどりつきましたが、あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。

地震や火災が一応収まったと思う間もなく、こんどは暴動が起るとの噂が立ちました。社会主義者や労働者、朝鮮人が火を放つとか、井戸に毒を投げ入れるとか云われ、軍隊がでたり、町の人たちが組織した自警団や、右翼団体が鉄砲や刃物、竹槍などを持って警戒にあたり、ものものしい状態になりました。

大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。しかし、これは結局デマで、実際に殺されたのは、労働

者や朝鮮人、社会主義者でした。・・・与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。ヨーロッパに旅立つ前に、強い感動を受けた〈労働劇団〉の主宰者平沢計七氏はこの時、白色テロルのために殺されてしまったのです。大震災の時、平沢さんは純労働者組合の組合長でしたが、組合事務所のあった大島町で自衛団をつくり夜警をしていました。三日夜の十時頃、事務所へ帰ったところを制服巡査にとらえられ、亀戸署へ連行されて、そのまま消息が絶えました。

多くの社会主義者、労働者、朝鮮人が警察や軍隊を中心とするテロルや自警団の暴力に殺されましたが、当時は真相を知らませんでした。平沢さんもその夜亀戸署内で習志野第十三連隊の兵隊によって銃殺された、後にあきらかにされております。平沢計七氏と与志は直接の交際はないままに、平沢氏の虐殺となってしまったのですが、与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍のテロルに奪われたことは、与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。①

他方ベルリンに留学中の土方与志は、九月二日新聞報道で大地震を知った。その一カ月後復興しつつある祖国への復帰を決意し、モスクワを経てシベリア鉄道で大陸を横断する。途上ロシア革命七年後の首都では、新たなソビエト演劇にも接した。小山内薫と約束した劇団創立の構想を練り始めるのは、この旅路においてである。

① 土方梅子著『土方梅子自伝』早川書房、一九七六年。七六一七九頁。

大地震直後の祖国復帰（土方与志『演出者の道』）

一九二三年九月二日朝早くベルリンのホテルの一室に眠っていた私は、一枚の新聞を持って入って来たボーイに起こされた。ボーイは同情というよりもお悔みに近い表情をして、持ってきた新聞を渡した。いうまでもなくそこには前日の関東大震災のニュースが紙面をうずめていた。そこでは日本という島が太平洋に沈んでしまったかのように大げさに報ぜられていた。半年以上ヨーロッパ各地を演劇巡礼していた私はまず途方にくれた。

ちようど一カ月目に、このまま勉強を続けようかどうしようか思っている私のところへ、二通の手紙が舞い込んだ。その一つは親戚の一人からので、震災によって東京の劇場がほとんど潰滅してしまった。だからそれ等の復興がなるまで、ゆっくりそっちで勉強している、と書いてあった。他の一通は数年来左団次一座で親交を結んでいた河原崎長十郎からの手紙だった。彼はくわしく東京の劇場や劇団の消息を報告してくれた。「歌舞伎座の鉄骨、灼けて飴の如く」等という名文もまぎっていた。そして最後には、一日も早く帰って来て、東京の復興をいっしょにやろうというような事で結んであった。そこで私は、この二つの手紙を前に置いて迷ったが、結局河原崎の手紙に従って故郷ー東京の演劇の復興に参加しようと決意した。

もうその時は日本の新聞等も手に入る事が出来て、沢田正二郎氏が日比谷公園で野外劇を演じ、荒廃の中の市民の圧倒的な喜びとなったというような事も知ったし、また今まで色々な法律や条令で窮屈に縛られていた劇場建築に対する制約が緩和されて、バラック建ての劇場も許可される事も知った。そこで私がヨーロッパに出発する時に、小山内薫先生と帰国後は演劇研究機関を二人で作ろうという約束を思い出し、それ

をさらに拡大して、まず劇場を持った演劇・劇団活動を始めようと考えた。

まだ国交も開けていなかったソビエト同盟政府の、大震災をうけた日本の国民への同情と好意によって、幸い在外の日本人を最も帰国のための近道であるシベリア鉄道通過を特別に許可するという措置が取られた。私もこの特典を帰国の方法として選んだ。

第一次世界大戦終結、十月革命からわずかに数年後であり、近道といってもベルリンから日本まで一カ月もかかった。その途中シベリア鉄道に乗りつぐためには一週間もモスクワに滞在しなければならなかった。これはしかし、私にとってたいへん有難い事で、その間新しいソビエトの演劇に、また社会やソビエト人の生活に接する事が出来た。

この一カ月の旅行中、私はブラック劇場の設計や劇場の座組等に関して様々な想像を楽しみ、一応成案を作った。十二月の終わりに私はようやく神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。①

後年通俗小説の大家となる久米正雄は、当初は戯曲家を志望し、小山内薫創刊の『新思潮』に芥川龍之介らとともに参加する。同雑誌に発表した社会劇『牧場の兄弟』は、半年後新時代協会によって有楽座で初演され、精緻な心理描写や抒情的な田園風景によって高く評価された。「いまだ大学の一文科学生たりし時の作に拘わらず、

① 土方与志著『演出者の道―土方与志演劇論集』未来社、一九六九年。一二一―一二二頁。

早くも彼が卓越の素質と豊饒の才能を発揮し、当時の創作戯曲の水準を抜いて華々しい出世作となった。」①

大地震に大津波も伴って、鎌倉は甚大な被害を蒙り、そこに居合わせた久米について、療養中の元老松方正義と同じく、死亡説が東京で流れた。② 広津柳浪や葛西善蔵等の文士も当地にいたが、精細な久米の震災記録には、元新劇女優たる衣川孔雀の被災や恋愛至上主義で著名な厨川白村の遭難も誌される。

久米正雄「鎌倉震災日記」

九月一日。鎌倉に来てより早起きの癖つき、朝八時頃起床。夜来より驟雨時々到り、荒模様なり。是では今夏最終の土曜日も、浜の人出尠なかるべしと思いて、せう事なしに机に向い、手紙など書きいたりしに、突如陰鬱なる地鳴りと共に地震起り、家きしみ始む。やや暫くして止むべしと思いに、更に激しくなりて、茶の間との間の襖、小生の方に向い倒れ来たりしかば、直ちに躊躇せず屋外に飛び出す。揺れ始めしより約一分ならん。予が脱出したるは、付近にて第一番なり。続いて人々出づ。と、見る間に第二の激しき上下動到り。目前に立ちいたる母屋鶴見細工店の文化住宅、赤き瓦屋根を揺れつかせたるまま、海鼠壁ばらばらと剥ぎ落とせる間に、街路に向かって倒壊す。……顧みれば吾が亜鉛葺きの矮屋のみ、土台石の上にて上下左右、揺るるままに揺られいて、別條なく、殆んど傾きもせず、奇蹟とも天祐とも云うべし。

① 大山功著『近代日本戯曲史 第二卷（大正篇）』近代日本戯曲史刊行会、一九六九年。五二五―五二八頁。

② 「凶災と文壇消息記」『文章倶楽部』大正十二年十月号）九五―九六頁。

予はそれより直ちに海嘯の襲来を恐れ、直ちに馳せて、長谷観音の高台に登る。観音はやや傾きたるも、太柱ゆゆしく重き茅屋根を支えて、思わず感謝の祈願を籠めしむ。直ちに左手、海を見晴らす覽台に至るに、傾き倒れたる家々を点在せしめたる、松や砂なる陸地のかた、海はと見渡せばこは如何に、常に波の打ち寄せる渚辺、予等が日夕潮浴に嬉戲しいたる渚辺より遙かに沖へ二、三町、或いは四、五町、半里も引きたらんとかと思わるるる程に、海水遠く隔たりいて、小坪ヶ鼻と稲村ヶ崎とを連結する一直線あたりに、白く波頭を騒がしいるを見る。・・・やがて予期したるより小さけれど、土用波より二、三倍のあらんかと思わるる波、白く波頭を噛みて、干潟を満たし来るを見て、やや安堵の胸を撫でおろす。されどその海嘯も、鎌倉全土を没し尽さずとするも、材木座、由比ヶ浜、長谷、坂の下の海浜は、確かに浸し去らるべきを思い、材木座なる知人の家が氣遣いなるまま、危険を冒して山をくだる。

途中、海岸通りを行きたるに、一の鳥居前にて小野君に出会い、隣りなる山階宮邸にて、妃殿下直ちに圧死され、大妃殿下いまだ梁の下に居給うと聞き、災害のかかる雲上にまで及びたるを初めて知りて、いたく心おののきぬ。・・・

それより田中純が許に至りたるに、彼が家は幸いにも、僅かに傾きたるままにて、木立深く広き庭には、已に全壊の厄に会い、僅かの空隙より出で来りし広津柳浪氏とその一家、および付近の人々避難しおれり。やがて田中は、二愛児を失いて悲嘆に身も世もなげける寺本夫人もとの衣川孔雀君を伴いて帰り来るに会う。平生元気なるドクトル寺本、悲痛に力抜けたる如く、後より沈鬱ながら従容たる態度にて入り来たる。慰む言葉だになし。丁度昼飯時にて、その二児は台所の石油焔炉の前に馳走のできあがるを待ちたるまま、上より潰され、直ちに火を浴びて、救出する暇さえなかりしとか。・・・

(九月三日)夜、仮小屋生活の苦痛を和らげんため、某酒店に至り、恐る恐る日本酒二合入りを二本手に入る。不安なる、冷酒、実に腸に滲みて、味永久に忘れ難かるべし。予が、厨川白村氏の計を知りたるは、その前後にして、実に偶然の事に属す。・・・予は直覺的に、直ちに白村氏が鎌倉に居住するを思い起し、材木座の程遠からぬ植木屋に、蝶子夫人を訪ねたり。夫人は眼を泣き腫らして、奥より出で来たり、予が言葉少なき弔問に答えたるが、白村氏は三一日に子供達を京都に帰し、己れは九月八日とか九日とかに、東京市社会局主催の講演会に臨むため、なお鎌倉に残りいたるが、震災当日は折り悪しく兩三日前よりの大腸カタルにて、かの口さがなき京童の所謂〈近代恋愛館〉の二階に臥床しいたるを、地震と知るや直ちに夫人は駆け上りて、扶け下ろし共に戸外へ出でんとしたる際、不自由な足の運び遅かし、後ろより倒れ来りたる倒壊家屋に胸部を圧せられて、救出さるるには救出されたるも、医師の手当の行き届かず、僅かに一塊の水を手に入れ、僅かづつ口中に噛みて、二日生命を永えたるのみにて、三日カンフル注射の効もなく逝きたりとか。臥床中、頭脳と言語は明晰にて、夫人に言い残せし事も数々あれど、幾度か書きかけて終らざる原稿の事を、死ぬまで心残りとしせしと聞きし時、予は黯然と涙ぐみぬ。

思えば、かつて『女性改造』の講演会に、ともに壇上に立ちたるもの、先には有島氏を失い、今また厨川氏を亡う。非常の際弔する人もなきに、せめて予がいち早く聞き知りて、兎も角も哀悼の意を表し得たのは、因縁と云うべきかなにと云うべきか。蝶子夫人はくれぐれも改造社人々に宜しく伝え呉れよと云えり。付

記して以て、天災記の末尾となす。白村氏の霊も乞う、諒せよ。①

女優衣川孔雀は上山草人に見出され、帝国劇場での初舞台『ファウスト』において喝采を博した。以後彼女は可憐な演技によって新時代協会のシンボルとなり、草人からも寵愛を受ける。『サロメ』や『桜の園』でも人氣を維持するが、やがて孔雀はかかりつけの医家寺本定芳と愛し合うに至る。齒科医のさきがけたる彼は、泉鏡花の門下でもあって、演劇にも関心を抱いていた。大正四年三崎町東京座での『みなし児』を最後に、彼女は草人のもとを去り、寺本と結婚して二児の母となった。鎌倉では文士達の親睦サロンで司会も務めたとされる。②。

衣川孔雀の『ファウスト』出演

『ファウスト』の配役は予定通りファウスト博士が草人、マルテが浦路、ワグネルが音楽学校出の原田潤、メフィストと舞台監督が伊庭に決まったが、マルグレーテをやる女優がない。これには（イブセン作『ヘッダ・ガブラー』の女役）テヤの時以上に困ってしまった。そのときであった。草人はすばらしい女の子を見つけたと言って、牛円貞子という十八歳の娘を紹介したのだった。これが後の衣川孔雀であった。

① 久米正雄「鎌倉震災日記」（『久米正雄全集』平凡社、一九三一年。第十三巻、二四一―二四八頁。

② 田中栄三著『明治大正新劇史資料』一〇八一―一〇頁。

〔参照〕『蛇酒』（上村草人著『煉獄』新潮社、一九一八年。）

・・・

そこでさっそく試験をする段になって、幹部連中が立ち合いの上、『痴人の死』を朗読させようとした。ところが、たいていのひとはすぐに読み出すのが普通だが、彼女は指定された箇所を何回も読んだ揚げ句、脚本の意義を訊き出し、「素養はありませんが」と断ってから読み出した。なかなか落ちつき払ったものであった・・・

切符にはプレミアムがついて飛ぶように売れ、三階四階の切符売場には群衆整理のために騎馬巡査が主導した。こうして五日間で一万円という驚くべき収益をあげたのだった。新劇としては前代未聞の大入りであった。協会は草人の個人劇団になったので、この収入は一応草人のものであった。帝劇を打ちあげた『ファウスト』は大阪の帝国座で十日間上演することになった。川上音二郎が建てたこの劇場は、川上の死後まったく腐っていたが、久しぶりに大入り満員となった・・・

この舞台では衣川孔雀のグレーチヘンが一般の見物から圧倒的な評判を得たのだった。孔雀で客が入ったとも言えるほどだった。そして松井須磨子にも及ぶ天才的な新人と言われた。伊庭のメフィストも絶讃された。「衣川孔雀、その音声の表情と姿態の表情とには兎に角見るべきものがあつた」と評され、中には「孔雀の出現は劇壇の一慶事である」という批評さえあつた。①

① 松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』筑摩書房、一九六六年。一一一頁―一一四頁。

厨川白村が世に知られるのは、なによりも恋愛至上主義の理念、男女の真摯な愛こそ人生における最高の価値、との思想による。その著述『近代の恋愛観』は、エレン・ケイの論著やブラウニングの詩作を紹介し、自由な愛と青春を希求する人たちに多大の影響を与えた。朝日新聞等に連載され、大震災の前年に刊行された同書が、多くの演劇人を励ましたことは、伊沢蘭奢や田村秋子の伝記からも察せられる。

恋愛至上主義（厨川白村著『近代の恋愛観』）

むかふに小さな塔が残つてゐる。八重むぐらの蔽へるに任せたこのさ、やかな櫓のあと、それは昔王侯が嬖臣寵妃をあつめて、戦車競走をながめた宏大な演技場の跡でもあらうか。

その塔のなかに身を潜め、こよひ男との逢瀬を待ちわびる金髪白面の少女がある。男の來たるを今や遅しと胸轟かしながら、息をこらし目を見張つて佇んでゐる。恋人が來れば、つと歩み寄つて二人はたちまち無言にして相抱くであらう。黄金の戦車、百萬の大軍、今は影をも留めて居ない、残れる者は僅かにこの廢墟ではないか。しかし男と女との戀、そこには今も昔も變りない永遠性があり恆久性がある。千歳を隔て、なお滅びざるものは両性の恋だ。幾世紀間の馬鹿騒ぎ、無駄骨折り、その勝利をも光榮をも黄金をも、すべてを皆葬り去れ。戀のみが至上である。

『廢墟の戀』と云ふ美しい歌に、詩聖ブラウニングはこう歌つた。その歌のこゝろを、バアン・ジヨンズがまた絵にもかいた。．．．

恋愛讚美、女性讚仰はおろか、女を人として考えることさえ知らないで、みずから国粹を説き、文化を口

にし、五大国民の一つなどと独りよがりで、自惚れる人種がある。この人種は不思議にも男女関係を常にさげすみ根性でみることにみに慣らされている。何でもない男と女がちよつと立ち話をしていても、たちまち猜疑のまなこを光らす。いわんや両性の恋愛関係と見れば、それを愚弄したり嘲弄したり、面白半分にかかったり、それでもまだ気が済まなければ、今度は恋愛を罪惡視し背徳乱倫呼ばわりまでしようという恐ろしい人たちである。記紀万葉のごとき古代の文献に徴しても、また平安朝の文学に現れた所を考えてみても、日本人は本来もつと自由に、もつと解放的に、もつと正しく両性関係を見ることのできた聡明な人種であつたのだ。．．．

恋愛の心境においてのみ人はもつとも完全に人でありうる。たんに生殖という問題を外にして考えてみても、男は男一人では完全なものではなく、女は女一人ではけつして完全なものではありえない。卑近な場合を取つてみても、一生の間ひとたびも恋を味つたことのないような人、あるいは終生全く異性に接しないような人には、人として必ずどこかに大きな欠陥がある。この事実に向つて古代の希臘人はプラトン一流の詩的な神話的解釈を下した。すなわち人間はもとひとつであつたのが、後に男と女という二つの性に分れたのだ。分れた男女は各々不完全なものであるがゆえに、その分裂のために悩み、お互いに地上生活において、再びあい合して同心一体になろうとする。．．．真の肉體的恋愛はここに生ずるのだと云う。この点においてプラトニズムの所説は、人生の實際現象の真を單に詩化して説いたものに他ならないと思う。

人間は孤独ではありえない。個性の發達したものほど、この孤独寂寥を感じることまた甚しい。そしてこの「心の寂しさ」が何ものによつても癒されえないとき、そこに恋を思ふ心は芽ぐむ。かれは異性の靈と肉によつてこの寂寞から救われようとするからだ。異性によつて救われようとする熱烈なあこがれ、それ

がすなわち恋愛ではないか。・・・

結婚によって恋愛は一段落に達する。達してのちさらに新しき時期に入り、壮年期より老境に及び、最初の花々しい浪漫的恋愛はその光と色とを失うと共に、深潜的となり内在的となっていくたびか姿を変える。恋愛結婚によって成立した夫婦間におけるかくの如き永続性の恋愛は、単に戯曲小説が吾等に示す所の空想でも仮構でもない。私は遠い過去やあるいは外国のことではなしに、眼前日本の家庭においてさえ現にしばしば之を見ている。私はその適切なる一例として、与謝野夫人がみずからしるされた一節をここに摘録しよう。

「私達は二人の愛情にたえず新しい生気を吹込み、壊しては建て直し、かつ鍛え、かつ深め、かつ醇化することに努力しました。今から振り返って見ると、最初の頃の私達の恋愛は熱烈ではあるが、まだ甚だしく苦勞の足りない、塩気の乏しいものでした。私達は久しい間に幾千回の破壊と改造とを自分の恋愛に実行してきたのです。私達の夫婦関係は毎日々々新規蒔き直しを試み、毎日々々以前にない新しい愛の生活を築きあげてゐるのです。」（与謝野晶子「愛の創作」『明星』大正十年十一月号）^①

自由劇場第四回公演の一つ、戯曲『河内屋余兵衛』の作者吉井勇は、本来『明星』にも寄稿した歌人であつて、大正十年最初の歌集『酒ほがひ』を世に問うた。震災第二年の六月大阪プラトン社により上梓された『夜の心』

① 厨川白村著『近代の恋愛観』改造社、一九二二年。二一三、一四九―一五〇、二〇六―二〇八頁。

には震災を詠じた「業火余燼」二六首が収録される。なお、大地震の翌月刊行された雑誌『文章倶楽部』特別号（凶災の印象・東京の回想）には、白鳥省吾の詩「灰燼の中から」等とともに、「業火余燼」のうち十首が掲載される。

吉井勇「業火余燼」『夜の心』

何ごとの曠^{いか}りかしらぬ地震ひぬ 天意え解かずをのきて居り
人死にぬ修羅道のごと人死にぬ かなしいかなや人の死ぬこと
うち日さす都もほろぶ時来ぬと 業火のまへにをのきて居り
地獄絵をまざまざと見て思へらく 現身はいとあはれなるかな
いまもなおほ目に残れるは焼あとの 芝香が墓の寒きまぼろし

人を焼く煙とともに雨は来ぬ 冬まだ来ぬに寒き雨かな
怖ろしき幾夜を重ね生きながら 地獄の道をたどらむとする
空遠く飛行機見えて天日は ものすさまじく落ちむとするも
夜もすがら絶えず聴こゆる地の声に ふるへをのくわが心かな
吾^{あこ}子は寝ぬわれは眠らで夜を守らむ この怖ろしき更けがたき夜を

そのむかし馬楽と見たる月に似し 月はあれどもすまじき夜やめ
大地の曠りとすればころよし地震も畏れでかく云うや誰
生きながら黄泉のすがたをみるゝことが いかに悲しきものとかは知る
酒甕の覆るさま目に見ゆと 無頼のころ地震にはほ笑む
そのかみの別れに君と聴きしごと 地震の絶間に鳴ける虫かな

馬楽忌の酒に更けたるかへり路に 見し浅草の月に似る月
すまじき夜ながら空にかかれるは 黄楊の櫛にも似たる月かな
大空の月いと細し夜ごとの 心細きに月も瘦せけむ
ありし日の銀座思ひて涙落つ 世に亡き人をしのぶここに
華やける人の末路を見るごとき あはれき覚ゆ今日の銀座は

わが胸も焦土となりぬいかにせむ 寂しかなしと云う人も見ぬ
馬楽の忌小せんの忌など思ひつつ われ浅草の焼あとをゆく
浅草も焦土となれば焼あとの公孫樹も寒き秋なりしかな
源治店の路次もいまなし ありし日の人のおもかげいかにもとめむ
江戸名所図絵もほろびぬ わが夢も消えて空しと嘆けるや誰

うち日さす都のなかをたもとほり しみじみと知る現身の秋

①

大地震の五カ月前土蔵劇場での公演を無事果たした秋田雨雀は、七月初め有島武郎の葬儀に列したあと、月末東北への講演旅行に出発した。東京での大震災火災を知るのは九月二日青森においてである。丹念な『秋田雨雀日記』に八月二九日から九月一日までの執筆は欠如するが、以後数年間の絶えざる震災日誌はとくに貴重である。

震災日誌（『秋田雨雀日記』大正十二年）

九月二日 朝驚くべき報道に接した。大震と火災のために東京市全滅の報に接した。一日正午正十二時ごろ上下、水平の振動起り、大建築崩壊。十二階、ニコライ、三越、松坂屋など焼失。火は全市をなめつくしかかっている。一第一報をきき、老農社へ遊びにく。一宿屋へ帰ると、第二報、第三報がきていた一戒厳令発布の報一自動車で魁へいき、回報をみて、枋内農学士の宅により、帰路再び魁に寄り、食糧略奪、抜剣の報を受け、自動車で土崎へ帰った。今夜こそ怖るべき夜だ。今夜は怖るべき夜になりはしないか？

九月三日 暴動化はしないか？東京の家族も心配になるので、足助君とわかれて、黒石へかえった。黒石では電報をみて、東京へ出発したものと思っていた。明日東京へ向って出発の用意をする。小坂、北岡、鳴

① 吉井勇著『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻、四一二―四一三頁。）

〔参照〕吉井勇「業火余燼」『文章俱樂部』大正十二年十月特別号（凶災の印象・東京の回想）、三三頁。

海の諸君来訪。東京の模様について語った。

九月四日 東京市の八分まで全滅らしい。きょう黒石を出発。出発前に朝鮮の鄭鳳吉君が訪問してきたので、警察ではだいたい問題にしているらしい。刑事が朝からつききりである。午後一時の汽車で出発。川部でそばをたべた。淡谷君の家へより、それから盛を訪ねた、水筒を淡谷家から借り、食糧をととのえて夜の急行に乗る。上京客で立錫の余地もない。宇都宮の参謀大尉と同乗。朝鮮人の流説の調査をきいて皆で笑った。しかし国民の軽率には驚く。沿道は戦闘気分だ。汽車が遅れて、赤羽に二時ごろついたので、小学校へ一泊。九月五日 赤羽の小学校では教師が救護につとめていた。親切に應對してくれた。同行十人ほどテーブルの上に眠った。夜なかに一回地震があったので驚いてとびだして、時計のガラスを破った。はじめて大震後の東京へはいるしたくをした。自分の家のことなぞ心配しながら、池袋行の汽車に乗った。まるで戦争だ。九月六日 午前中に雑司谷へつく。家は安全！食糧はいくぶん給与されていたが、全体として食糧欠乏、避難民は全部給与。比較的よく手廻しができていた。戒厳令―自警なぞでもものしい。朝鮮人虐殺は問題になるらしい。今日では反対宣伝をしているが、むずかしい問題になるらしい。妻も田中君も赤ん坊もみんな元気でいるので安心した。しかし、驚くべき損失は直接間接にぼくらに影響してくるだろう。・・・

九月十一日 朝鮮人問題につづいて社会主義者の検束の話がでている。小川君とぼくは検束されていることになっているのだそうだ。小川、藤森、生方の三君を誘い、前田河広一郎君の検束の話をきいた。自警団だ密告したらしい。藤森、小川君なぞが弁解して、取り返してきたそうだ。夜警。(大門会)・・・

九月二十六日 高木、松田の諸君が写真を撮ってくれた。(大杉君はリーブクネヒトと同じ運命にあった。)戒厳司令官福田大将交代。憲兵隊長罷免、甘粕憲兵大尉軍法会議廻附の事が理由不明のまま問題になっている

たが、きょうはじめて発表された。甘粕憲兵大尉は平素社会主義に反感をもっていたが、大震後無秩序の状態に際し無政府主義の巨頭大杉らが不穩の行為にいずるを恐れて、大杉ほか二名を某所に連出して、銃殺したという犯罪分明にされたので、軍法会議の附せられることになったのだそうだ。大震に比較すべきほどの大事件だ！国民の無智は怖るべきことだ！清藤君大鰐から来た。(大杉君銃殺の報(大いなる損失)・・・

十一月十三日 『解放』の戯曲着想。二つほどえた。一、震災にヒントをえた、避難民を主材としたもの、一、牢獄と二つの窓。表現主義ふうのもの。このいずれかを創作してみよう。ずっと主観的なものでいい。暁民会の川崎悦行君が市ヶ谷監獄で病死したという通知をうけた。立派な青年だった。仏教から生まれた社会思想家だ。二四才。不穩文書の件。午後高田保君に会い、ふたりで運天女史を中野に訪い、牛込でた。中野のカフェ・アザミによった。夜大門会にごたごたがあったのを仲裁した・・・

十一月二十日 松本弘二君がきて『解放』が三月に延びたということを書いていった。戯曲は月末に脱稿することにした。『女性改造』の短い感想「わが子の行末を見守りて」のために短いものを送る。「子供は自然の子」とした。

十一月二三日 かなりな強震。いいあたたかい日。茅野家から死んだ娘さんのくやみの返しがきた。佐藤君がきたのでふたりで墓地のほうへ歩いていった。酔って憲兵隊につれていかれた話をしていた。おもしろい男だ。夜千代子をつれて東洋大学へいく。記念会で『国境の夜』をやっていた。校庭での屋台舞台。月光に照されて五、六百人の人が見物していたのはおもしろい感じをあたえた。舞台装置は丸太小屋なのがよか

った。グレゴリーの『月の出』もやった。千代子と二、三のカフェによって帰った。①

大地震の翌月雨雀も雑誌『文章倶楽部』に詩編「死の都」を掲載し、十一月には戯曲の執筆を再開した。②着想されたのは青森へ逃れた被災者の苦境で、救護先における朝鮮人騒ぎを含み、表現主義による錯乱場面がフイナーレをなす。この脚本『骸骨の舞跳』は、翌年『演劇新潮』に発表され、関東大震災を主題にした文壇の代表作とされる。

避難先での不穏（秋田雨雀脚本『骸骨の舞跳』）

人物＝青年、老人、看護婦、医長、〇〇人、自警団員（後に骸骨）、貴婦人、避難民男女、其他

場所＝救護班のテント（立体派風の舞台装置を可とする。所謂マヴォ式の試みも面白いであろう）

老人　じき夜が明けましょうか？

青年　夜の明けるまではまだ二時間もありましょう。

老人　そうですか・・ああ何んてことでしょね・・こんな年になってこんな目に逢うなんて・・あれは何んの音でしょう？

①『秋田雨雀日記』第一巻、三二二―三二四、三三〇―三三一頁。

②『文章倶楽部』大正十二年十月特号。三七頁。

青年　何でもありません、汽車の音です。あなたは何時ここへ降りたんですか？

老人　ゆうべです・・ゆうべ遅くです・・一体何んて話でしょうね・・こんなばかな話があるものでしょうか？

青年　東京でやっぱりひどい目にお逢いでしたか？お互に飛んでもない眼に逢いましたね。

老人　ひどい眼位じゃありません・・私は娘と孫に死なれてしまいました・・それに私は病身でして、そんな事をして株なぞ出来る身体じゃないんですけれども・・

青年　然うですか、お気毒ですね・・そして娘さん達や孫さん達は何処で失くなったんですか？本所でですか？

老人　いえ、向島です・・私共は三十年向島に住んでいましたから・・何んでも近所の人の話では娘は孫をつれて土手に逃げていたのを、人に押されて大川へ落っこってしまっただそうです・・それはお気の毒なことをしましたね。あすこでは随分そんな人があつたそうですね。あなたはそれでよく逃げられましたね・・

老人　一層死んだ方がよかったんでしょう・・娘や孫に死なれて何が楽しみです生きて行けますか？そう思いになるのも無理はありません・・でも世の中は生きていさえすれば、また何とかなりましよ・・いや実は僕自身もいまのところ何の光明もないんですが・・然し生きている間は生きていなければならないんです

〔中略〕

看護婦　気分のお悪い方ありませんか？

避難者 看護婦さん、先生を呼んでくださいな・・・お腹が痛んで仕方がないんです・・・

避難者 看護婦さん、私に水を一杯ください・・・

避難者 看護婦さん、この身体で船に乗れましょうか？・・・

避難者 看護婦さん この切符で只で船へ乗れましょうか？

看護婦 皆さん、静かにしてください。そう一度におしゃっちゃん何うすることもできません・・・（老人に）

あなたは今夜船にお乗りになれますか？

老人 私はそれをおあなたにお尋ねしたいんです・・・もう少しここへ置いていただく訳に行かないでしょうか？・・・何うも身体が痛んで仕方がないんです・・・

看護婦 そうですか？今先生がいらっしゃいますから診察していただいたらよろしいでしょう・・・

そのとき一団の自警団員がテントの中に入り込んで来る。甲冑を着て抜刀をした者に統率され、在郷軍人の服装をした者、陣羽織を着た者、鉢巻きをした者、学生服を着た者、各々手に槍刀剣類を携えている。

甲冑 看護婦さん・実は探し物があるんですが、一寸テントの中へ入れていただきます・・・

看護婦 そんなに入って来ちゃ困りますね。患者が寝ているんです。

鉢巻 一々断る必要ねえじゃねえか・・・さあ勝手に入って探そう・・・

看護婦 （唇をふるわせて） いけません・・・入っちゃいけません・・・

甲冑 看護婦さん、実はこのテントのなかに○○○○○○・・・現に汽車から降りるのを見た男がいます。

・・・○○○○○○

陣羽織 ○○○○○○○・・・市民の安寧のためです・・・鉢巻

在郷軍人 そうだ、市民の安寧のためだ

鉢巻 ぐずぐず言っていないで早く探そう・・・なんでもやつつけちまえ・・・

自警団員は提灯を振り廻して避難民の中を歩き廻る。看護婦は蒼白な顔をして一団の後を追うて行く。
自警団員の一人は、老人と青年の背後に子犬のようにしゃがんでいる一人の男の周囲に立つ。

鉢巻 こいつだ！・・・こいつだ！・・・提灯を出せ・・・皆なこの顔付きを見ろよ・・・

ある男 （二四、五歳の労働者風の男） 僕は何もしないんです・・・

学生 （真似をする） 私はなにもしないんです・・・

陣羽織 やっつけちまえ・・・やつつけちまい！

甲冑 乱暴なことをするな・・・己れが今調べて見るからな・・・おい、○○○○？嘘を言っちゃ為にならないぞ・・・

ある男 僕は日本人です・・・皆さんはなにをするんです？ ①

① 秋田雨雀著『骸骨の舞跳』叢文閣、一九二五年。三一―二三頁。

〔参照〕「秋田雨雀と表現主義―秋田雨雀と関東大震災の戯曲」（大笹吉雄著『ドラマの精神史』新水社、一九八三年。）